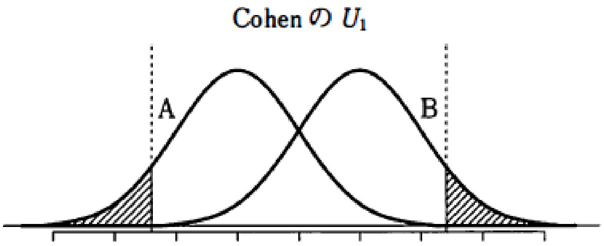
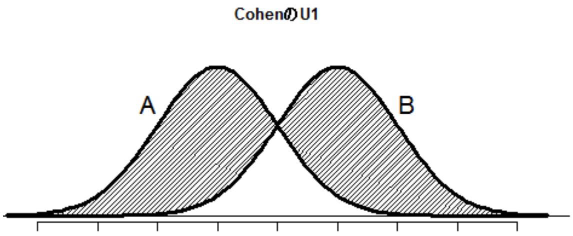
頁	誤	正
p.26 2.2.3 l.1	測定された検定統計量	算出された検定統計量
p.66 l.15	（分母が n-1 の）	（分母が N-1 の）
p.92 最下部	U_1は，2 つの分布が重ならない x 軸の範囲にある面積が，2 つの分布の全面積のうちどれだけを占めるかを表します．逆に言うと，$1-\mathrm{U}_1$は 2 つの分布が重なる x 軸の範囲にある面積の割合です．	U_1は，2 つの分布を重ねて描いた分布のうち，重ならない部分の面積が全体のうちどれだけを占めるかを表します．逆に言うと，$1-\mathrm{U}_1$は全体のうち 2 つの分布が重なる面積の割合です．
p.93 図 3.8 上		
p.94 l.12	全分布のうち 0.7%ぶんだけが	全分布のうち 7.7%ぶんだけが
p.95 表 3.2	【$\delta=.10$のときのU_1】 .007	【$\delta=.10$のときのU_1】 .077
p.110 (3.121)	$\frac{2(13.40-1.98)}{76.40+1.98}=0.29$	$\frac{2(13.40-1.98)}{76.40+8.43}=0.27$
p.125 4.2 l.8	ですから，上のような点数のばらつきもあわせて表現することが可能です．	信頼区間によって，上の各状況においてあらかじめ定められた確率(信頼水準)で母平均が存在する区間を表すことができます．
p.126 l.9	Masson & Loftus (2003) の方法では，標準誤差ではなく，分散分析における誤差を使用します．	Masson & Loftus (2003) の方法では，分散分析における誤差を使用します．
p.133 (4.13)	$\sqrt{\frac{1}{n_1}\times\frac{1}{n_2}}$	$\sqrt{\frac{1}{n_1}+\frac{1}{n_2}}$
p.136 (4.18)	$\frac{1}{n}\times$	$\frac{1}{N}\times$
p.138 l.5 と(4.20)	$1/\sqrt{n-3}$ 【2 箇所】	$1/\sqrt{N-3}$ 【2 箇所】
p.141 (4.27)(4.28) (4.31)(4.33)	n 【7 箇所】	N 【7 箇所】
p.141 (4.30)と下	$N_{variable}$ 【2 箇所】	k 【2 箇所】
p.143 4.5.2 l.4	$\ldots+b_i x_i$	$\ldots+b_k x_k$
p.143 l.5	単回帰分析と同じように回帰係数(B)を	単回帰分析と同じように回帰係数(b)を
p.143 l.14	標準偏回帰係数(β)	標準偏回帰係数(b^*)

p.143 (4.37)	$CI = \beta_i \pm t_{critical} \times SE(\beta_i)$	$CI = b_i^* \pm t_{critical} \times SE(b_i^*)$
p.144 (4.38)と下	n 【4 箇所】	N 【4 箇所】
p.145 l.8	有意水準についても知ることができる	有意性についても知ることができる
p.151 表 5.1	表 5.1：検定における 4 種類の結果 効果なし (効果量=0) 効果あり (効果量≠0)	表 5.1：検定における 4 種類の結果とその確率 有意差なし 有意差あり
p.151 l.3	第 1 種の過誤(α）と第 2 種の過誤(β）は	第 1 種の過誤(その確率がα）と第 2 種の過誤(その確率がβ）は
p.156 l.16	差や効果がある場合,	有意な差や効果がある場合,
p.160 コラム l.5	差がない場合,	差がないという仮説を検討する場合,
p.176 注 5	$\mathrm{p}(\mathrm{H}_1 \mid D)$=68.6%	$\mathrm{p}(\mathrm{H}_1 \mid D)$=58.6%